



舞い降りたご主人

とよさき さち こ
【豊崎 幸子・愛媛県】

その日はHさんにとって、人生3度目の手術の日だった。私は、手術の準備をするためにHさんの部屋を訪ねた。Hさんの表情は穏やかだったが、雰囲気から緊張が伝わってきた。ふと私の口から「Hさん、癒されグズってありますか」という言葉が出た。「癒されると言えば…」天井を見たまま、Hさんはつぶやいた。そして、静かに枕元に置いてあったバッグに手を伸ばし、中から紺色の石のブレスレットを取り出した。

「これ、主人がいつも腕に着けていたものなんです」「まあ、すてきですね。じゃ、これを手首に着けて手術室に行きましょう」「手術室の看護師さんからは、何も身に着けないで来てください、と言われていています。いいんですか?」「手術台に横になったら外さないといけませんが、それまでは大丈夫です。手術室の看護師には私から話をしておきます」

Hさんは「うわあ、ありがとうございます」と、うれしそうに左手首にそれを着けた。Hさんのご主人は先日、急性心筋梗塞で亡くなられた。「携帯持った?」「うん、持った」。出勤するご主人の後ろ姿に語り掛けたのが、最後に交わした言葉だったそうだ。ご主人はこれまでのHさんの手術全てに付き添い、支えてくださっていた。Hさんにとっては、度重なる手術、それだけでも不安である。それなのに今回は夫として、そばにいてあげることができない。そんなご主人の思いも伝わってくるようだった。

手術室に入室した。横になり、体位を整えてから、Hさんはブレスレットを外した。「ありがとうございます」Hさんの表情は、とても落ち着いておられた。手術室の看護師の配慮で、ご主人のブレスレットは、Hさんのファイルの上にそっと置かれた。

手術は予定通り終了した。後日、Hさんは、「麻酔からうっすら目が覚めて、気が付くと、すでに左手首にブレスレットを着けてくださっていました。とても、ほっとしました」と言われていた。

今でも不思議に思う。なぜあの時、突然「癒されグズってありますか?」と尋ねたのか。ただ、これまでにない「愛の力」を感じたことは間違いない。私はご主人から、思いを託されたのだと思った。感じたままを言葉にして伝える。私がいつもベッドサイドで行っている、何気ないコミュニケーションだ。あの時、何も飾らない自然なその空間に、確かにご主人はいた。